

王 思文 (オウ シブン)

中国出身

日本女子大学 文学部日本文学科

庚子年の端午

本棚が過負荷になっていたことにやっと気づいた。最近あまり使わない資料を段ボールに入れようと思って、6月のある土曜日に、去年使っていた資料と筆記を整理した。

偶然、去年にとっていた近世文学史の筆記を見つけた。初めのページに丁度江戸時代の暦についての内容があって、一年前の記憶を思い出した。

せっかく日本に留学するので、上代から近代まで、全ての文学史を取ろうと思っていたが、残念なことに中古が取れなかった。文学史の授業の中で、一番楽しかったのが近世だと多くの日本文学科の学生たちが考えている。中国出身の私にとって、近世の文学作品は、なんとなく親しい感じがあるので、より近世文学史の授業が好きである。



江戸時代では、身分が固定し、行事も固定した。その時はまだ不定時法のため、太陽暦ではなく、太陰暦を用いた。一月七日は人日（七草）、三月三日は上巳（桃官女）、五月五日は端午（重五）、七月七日は七夕、九月九日は重陽であった。

現代の日本、中国、韓国も五節句という年中行事が残っているが、太陽暦と太陰暦の区別

により、日本は太陽暦を用いて、五月五日に端午となる。一方、中国と韓国はまだ旧暦を使っているため、旧暦の五月五日（六月になる）を節日とした。今年は丁度六月二十五日である。

中国の古俗『荆楚歳時記』には、この日には菖草をとり蓬の人形を門にかけて毒気を祓い、菖蒲酒を飲み、また五色の絹糸で日月星辰、鳥獣をかたどった続命縷というものを作って腕にかけたとある。災厄を除き病魔を避けるためである。

今は日本に居住して五年目であり、日本での五つめの端午である。しかし、今年の端午は特別な存在だと思う。いつも発表の前や期末頃に、インスタント食品ばかり食べて、レポートや受験準備などをするため、夜更かししたことが多かった。健康の重要性をあまり意識していなかった。今年流行っているウイルスにより、全世界 850 万人は感染し、45 万人の命が奪われた。このことで、命の弱さと健康の重要さをはっきり意識するようになった。

そろそろ端午節になり、うちの母から電話があった。「端午節の準備はできたか。東京は今、大丈夫か。蓬の飾りと五色糸が買えるか。」このような対話が繰り返していた。故郷の両親に心配をかける心咎めが連日の雨のように続いている。

今年の端午節は特別だと感じて、以前「迷信」と思っていたことを信じたい。古俗をし、「災厄を除き病魔を避ける」と祈っている。今回の災厄がきっと消えると思っている。